

アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

3

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「無題」

(2010 もしくは 2012 年, 技法: 陶土, 自然釉 H290×L280×D90)

撮影: 高田真澄

アール・ブリュットは分からない

精神科医
北山 修

心の病に関する理解や治療の分野で有名な精神分析医、ジークムント・フロイトは、「ミケランジェロのモーゼ像」(1914)というエッセイで、こういう風

に書いている。
「たとえば音楽では、ほとんど愉快を感じない。私には合理主義的な、もしくは分析的な素質があり、自分が感動しているながら、しかも他方で感動の理由、感動の根拠が分からないまだということに我慢できないのである」

しかしながら、多くのアートが、その感動の理由がはっきりしていないのである。ゆえに、感動の理由が分からないままでは楽しめないというのでは、科学者は多くの芸術作品が愉快でなくなる。

だから、この「アートの心理学」では、まずは楽しんでから考えることにしなければならない。そうすれば、知的な理解を拒否するところが、アートの愉快の本質であることが分かってくる。私たちが「アートによって癒される」のは、きっと「理解する」という営みから解放されるところにあるのだろう。

とくに、アール・ブリュットの作品を見ている時の感動の理由は、月並みな説明や普遍的な心理学的解釈を拒否するところにあると思う。だから鑑賞では、あまりに個性的な体験となり、まずは言葉を失うことが多い。

今月の作家

澤田真一 Shinichi SAWADA

1982 年生まれ／滋賀県在住

澤田が粘土による創作を始めたのは通所施設に通い始めた2000年頃からである。創作は春から秋の期間に週2〜3回、山奥にある窯場で行っている。

澤田は作品の完成形が見えているかのよう

に、止まることも迷うこともなく、細く長い指でトゲを淡々とつけていく。澤田の作品は観るものにモノが創生される驚きや人間の豊かな果てしなき創造力を伝えてくれる。(解説: 小林瑞恵)

企画協力: NPO 法人キャンサーリボンズ
「サンクスナース」プロジェクト